

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 06 月 15 日現在

機関番号：37301
 研究種目：基盤研究 C
 研究期間：2008 年～2012 年
 課題番号：20520196
 研究課題名（和文）GHQ/SCAP 関連資料を基軸とした戦後文学成立期に関する実証的研究
 研究課題名（英文）A study on the forming period of post-war literature by revealing the frame of GHQ/SCAP-related documents with empirical approach.

研究代表者
 横手 一彦（YOKOTE KAZUHIKO）
 長崎総合科学大学・工学部・教授
 研究者番号：60240199

研究成果の概要（和文）：この 5 年間に、在米資料や国内資料の確認作業から、新資料の発掘に努めた。また、GHQ/SCAP 検閲制度の枠組みを解明する作業などによって、戦後文学成立期の全体性の再構築を試みた。そのため、本課題を 10 領域に細分化し、これらの研究作業や論究によって、全体的な成果を獲得する研究計画とした。また日本は、一九四五年八月から五二年四月まで、他国に軍事占領されていた。「敗戦期文学」や「被占領下の文学」との視座から、実証的な手法による論考を積み重ねることに努めた。

その過程で、研究計画を策定する段階において、想定していなかった意外の進展を得た。これを、「研究成果」項目に列記した。

研究成果の概要（英文）：For these five years, I have devoted myself to discover new materials through researching documents in the United States as well as in Japan. Also, I tried to reconstruct the whole aspect of forming period of post-war literature by revealing the frame of GHQ/SCAP (General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers) censorship policy. For this purpose, I subdivided this theme into ten categories and drew up a study plan to obtain general results based on the studies and discussions on these categories. In addition, Japan was under military occupation by the Allied Powers from August 1945 to April 1952. From the viewpoint of *defeat period literature in Japan* or *literature under military occupation in Japan*, I tried to accumulate study results with empirical approach.

In the process to drawing up the study plan, unexpected findings were obtained. These findings are listed in the "Study Results".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	700000	210000	910000
2009 年度	500000	150000	650000
2010 年度	500000	150000	650000
2011 年度	500000	150000	650000
2012 年度	600000	180000	780000
総計	2800000	840000	3640000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・2901

 キーワード：戦後文学 戦後文学成立期 被占領下の文学 敗戦期文学 プランゲ文庫
 GHQ/SCAP 検閲

1. 研究開始当初の背景

本申請は、2003年度から2006年度にかけての科学研究費課題・「戦後」の文学形成に関する基盤的研究(基盤研究(C)・研究課題番号15520130)の成果を踏まえたものである。

この到達地点から、改めて新資料を求め、未解明の文学的事象などに立ち入り、これらを再確認し、論究し、確定する実証的な手法に基づいて、当該研究の高次元への展開を目指した。

当該の在米資料(米国メリーランド大学図書館プラング文庫など)は、マイクロ・フィルム化が進み、国立国会図書館がこれを受け入れ、事後的な作業を終えた分野から、順次、公開されるようになった。

この収蔵資料は、膨大な書誌データである。別途の研究組織が、独自の枠組みで、主に雑誌や新聞資料の項目、及び索引などを再整理し、公開し、この利便性を提供した。

このデータベースに基づいた個別研究が進展し、成果が公表された。このような動きによって、文学研究領域に限らず、多分野から、また社会的にも、1940年代後半の言語編成期への関心が高まった。

このような社会的背景や学術的動向を踏まえ、申請者の20年余りの経験知と、初期段階の研究から引き継ぐ問題意識と、収集した関連資料と、部分的に積み重ねた到達点を再確認した。このような広がりから、新規の研究課題として提示し、「キーワード」欄に記した観点から、この時期の全体像の把握に努めた。

2. 研究の目的

当該領域の時期区分を、大項目「戦後文学成立期」とした。そして、この時期の史的性格の側面を抽出し、これらに独自の名称を付すことで、不可視的な課題を顕在化させることを意図した。これらが、小項目「敗戦期文学」や「被占領下の文学」である。しかしこれらの名称は、文学史的用語として認知されたものではない。

本研究は、主に、実証的手法に拠って、演繹的な思考を組み立て、他方に、このような独自の論点を設定し、これらを先行させる帰納的方法によっても、当該領域への接近を試みた。

研究対象は、主に、米国メリーランド大学図書館プラング文庫所蔵資料と、GHQ/SCAP検閲関連資料と、日本側の関連資料である。これらを資料的な根拠は、本研究の成立要件を底辺で支えるものであるとした。

このような要件などを踏まえた研究構想から、新資料の発掘や検閲制度の考究へと具体的に進展し、戦後文学成立期の社会的動向と、

敗戦期の新たな意識形成と、被占領下の新しい文字表現(文学作品)の組み合わせや混沌を読解することで、これまでの文学史的理解や概略に対し、根拠に基づいた再構築を研究目的とした。

短期渡米調査で収集した在米資料を、帰国後、国立国会図書館などの所蔵原典と対照し、追確認作業を行い、また必要に応じて、また許可を与えられて可能となった場合、個人所蔵資料とも比較し、検閲原典の本文分析に努めた。作品毎に、また個別に、このような作業を積み重ね、これを研究の手立てとし、本研究の論究を進めた。

そして、これまでの当該領域の論考に中仕切りを付し、これまでを概括し、申請者の問題意識を再考するなかで、GHQ/SCAP検閲制度を再定義する可能性を試行し、新たな研究領域と研究方向を模索した。この過程で、見落としていた幾つかの契機に気づき、幾人かの方から、貴重な示唆を与えられた。

3. 研究の方法

科学研究費申請時に作成した「研究計画・方法」欄に、以下のような項目立てを列記した。概ね、この研究計画や研究方法に従い、個別的な作業を積み重ね、研究目的を達することに努めた。

しかし、この5年間の研究期間に、主に(3)領域に関連し、研究に着手した初期段階において、全く意図していなかった意外の進展があった。

また、2011(平成23)年3月11日(金)に、東日本大震災が発生し、日本国内が激しく動揺した。このことは、期せずして、本研究テーマの一部—長崎(浦上)原爆の考究—に重複するものであった。文学を研究する立場から、この大震災直後の状況に、どのように関わることか、どのように関わることが適切であるのかを逡巡した。むしろ、本研究の関わりの上からも、積極的に対応をするべきであると判断した。

このため、研究期間の中途段階で、対象範囲を拡大させ、初期段階の研究構想にはなかったのであるが、震災地域を踏査するなど、困難を言語化する意識を培った。

このため、結果的に、研究計画の全項目に対し、十分な成果を獲得することが出来なかった。初期段階の研究構想に立ち返れば、不十分、あるいは中途のままである研究項目があり、そこに積み残しがあった。

「研究計画・方法」

- (1) 領域=GHQ/SCAP 在米資料
- (2) 領域=同押収返還資料
- (3) 領域=同検閲等個人所蔵資料
- (4) 領域=同国立国会図書館憲政資料室所蔵資料
- (5) 領域=同検閲プランゲ文庫所蔵資料
- (6) 領域=同検閲資料
- (7) 領域=同周辺資料
- (8) 領域=同検閲の断片資料の書誌的確認調査
- (9) 領域=同時期米国日本語図書移動経緯の踏査と原典調査・被占領下の旧内務省資料等の米本国移送過程踏査
- (10) 領域=プランゲ文庫の史的 position 付け(関連年表の作成)

4. 研究成果

(1) 領域=GHQ/SCAP 在米資料

2008年9月の短期渡米調査により、シカゴ大学図書館、ハーバード大学図書館、コロンビア大学図書館などのGHQ/SCAP関連施設を踏査し、資料収集を行った。

また、2009年9月の短期渡米調査により、米国メリーランド大学図書館プランゲ文庫及び米国公文書館を訪問し、GHQ/SCAP検閲の原典調査を行い、周辺資料を収集した。

他方、2010年度、2011年度、2012年度は短期渡米調査を行うことが出来なかった。その意味では、想定よりも十全を為し得なかった。これは、意想外の研究進展が連続し、また大規模災害が発生したことによる。これらのことにより、研究主担者の関心が増幅し、対象範囲が拡大した。加えて、研究資金の自由度を失ったことにもよる。

(2) 領域=同押収返還資料

A 領域の資料収集の進展と、同時にその限界に伴い、プランゲ文庫資料などにおいて収集した資料を、帰国後、検閲システム通過後に、紙面上は整序され、検閲痕跡を残さない作品本文と対照し、本文に埋もれた事実と、この経緯の分析を行った。

また、他の国内施設が所蔵する資料などとも本文を対照し、前後の追確認作業を行い、検閲後の削除本文の書誌的調査によって、多面的に、GHQ/SCAP検閲の事実解明と、検閲制度を明確にする作業を積み重ねた。そして、限られた事例ではあるが、その必要に応じ、また許された範囲で、個人所蔵の資料と対照し、周辺事情の確認に努めた。

そして、与えられた機会に、また積極的に、研究発表や論文発表の形で、これらの成果の一端を公表した。

加えて、米国メリーランド大学図書館プラ

ンゲ文庫の協力を得て、当該テーマの独自企画を立案し、福岡市内の大学施設において、多視点に基づく研究成果の発表会を実施し、これを社会的に還元する方途の一つとし、このことに努めた(例. 編著『被占領下の国語教育と文学』(企画編集責任者)、2009年4月、メリーランド大学図書館プランゲ文庫発行)。

(3) 領域=同検閲等個人所蔵資料

長崎市内や沖縄県那覇市内や東京都在住の個人が所蔵する、長崎(浦上)原爆、敗戦期文学、被占領下の文学、GHQ/SCAP検閲に関する資料を直接に確認した。その資料を一時的に借用し、分析を続けた。それらの一部は、公表する許しを得て、誌(紙)面整理や編集作業などを経た後、論文形式に纏めた。

更に、特定の個人と面談する機会を求め、関連資料の原典確認や資料提供の許しを得る努力を重ね、新資料を発掘する努力を継続した。他方、未公表段階にあるが、類似の別種資料の踏査を継続している。

また、公的な施設(広島市内一施設と長崎市内一施設の計二箇所)が所蔵する未公開資料の存在を知り、それらが貴重な資料であるとの事実認定と、保管状態などの確認を行った。その予備調査や周辺調査を進め、公表の許諾を得るための交渉を、個別に、複数回にわたり行った。

これらの過程において、個人情報の公表制限などがあると指摘され、調査を中断することもあった。また行き違いなどがあり、結果的に許諾を得ることが出来ず、この側面に関し、乏しい成果のままに終わった。本研究は、このような未達の部分を残している。

公的な施設が所蔵する未公開資料の公表を拒まれ、成果獲得に至らなかったことは、研究成果の獲得という個人的事情より、むしろ、社会的に意義深い資料が、そのままに取り残され、そのままに埋没し、広く社会の共有知となり得ていない現状の限界を示す。一方において、これらを含む各施設の利用にあたっては、多くの利便性を付与された。

他方、長崎(浦上)原爆に関する資料や関係者の所在を求め続けた。この過程で、長崎市内在住のプロカメラマン(高原至・被ばく者)が撮影し、未発表のままに所蔵していた画像資料を入手し、その周辺調査を行った。そして、この未公開画像に価値があると判断し、独自の企画として立案し、冊子形式に纏め、解説や英訳などを付して公刊した(編著『長崎旧浦上天主堂 1945-58—失われた被爆遺産』(企画編集責任者)、2010年4月、岩波書店発行)。その後本書は、長崎(浦上)原爆への新たな関心を促す出版物との評価を受け、社会的な反響を得た。

また『雅子斃れず』(仮刷り版、プランゲ文庫版、長崎版、東京版などの諸版)は、最も早

く、長崎(浦上)原爆を作品化したものである。個人所蔵の原稿(書簡形式)、及び初出紙(新聞形式)を確認した。これらの資料は、長く所在不明であったが、偶然にも、この期に所在が突き止められたものである。

これらの複写資料を入手し、これに基づいて本文などを再編集し、長崎版『雅子斃れず』(旧版)を改版し、公刊した(編著『長崎・あのとときの被爆少女—六五年目の『雅子斃れず』』(企画編集責任者)2010年8月、時事通信社出版局発行)。今日的な理解においては、長崎(浦上)原爆に関する初期の言説は、永井隆の著作に傾いていた。これを、当時の言説環境に近い、永井隆と石田雅子が並立する形へと改めることが出来た。

また、修学旅行などで来崎する、多くの中学生や高校生が、当該領域への関心を新たに、関心を深めるための一助となる新規の文献を加えることが出来たと考える。著者は、被ばく時、一四歳の女学生であった。この作品は、兵器工場へ学徒動員され、被爆し、一昼夜爆心地周辺をさすらい、父の元へとたどりついた被爆手記である。

そして、同年7月から8月、長崎県立図書館主催「原爆展」に、当初の展示企画にはなかったのであるが、『長崎・あのとときの被爆少女—六五年目の『雅子斃れず』』の編集期間に、偶然に所在が再確認された経緯や、未公開資料である資料性格などを説明し、これら資料の一部の展示を、長崎県立図書館の担当部局に願い出た。そして、この意義が認められ、この一部展示が実現した(展示例.直筆原稿、仮刷り版『雅子斃れず』、長崎版『雅子斃れず』、東京版『雅子斃れず』、GHQ/SCAP 検閲資料の一部、長崎版と東京版刊行時の拡販用ポスターなどの周辺資料)。

また、この展示期間に、著者が長男夫婦に付き添われ、長崎を訪れた。そして、被ばく時の待避路などを再確認し、慰霊碑に刻まれた恩師や級友たちの名を確かめる機会ともなった。これらの行動は、地元の電波媒体や紙媒体において紹介された。

この研究領域において、研究計画の立案時に目算していた以上の成果をあげた。また、成果の一部を社会的に還元することが出来た。このことは、GHQ/SCAP 検閲と、被占領民・日本人と、文学作品(日本語)との位置関係を再考する一つの媒介なり得たと考える。そして、具体的な文字資料(記録)を発掘し、作品本文(記述)を分析し、現代の記憶を問い直すという本研究の主旨に沿う成果を、限定的に為し得たとも考える。

加えて、「幻の世界遺産—被爆遺構・長崎浦上天主堂の記録」と題し、未公開の写真パネル展を実施した(同企画実施責任.2009年7月14日～8月2日長崎市松が枝町7-15 ナガサキピースミュージアム)。同様に、「同」(2010

年9月17日～9月26日東京都中央区銀座長崎センタービルギャラリー 主催：長崎放送 後援：長崎県、長崎市、長崎新聞、岩波書店)を実施した。これらの成果の一端の公開は、多くの方々から好意的に受け取られ、また幾人かの方から、今後への貴重な研究上の示唆を与えられ、別途の領域から再接近する方途を教示されることもあった。

(4) 領域=同国立国会図書館憲政資料室所蔵資料

国立国会図書館における関連資料の収集に努め、この作業を継続した。しかし、同室所蔵の米国公文書館BOX資料番号毎の調査は、一部に着手したままであった。

(5) 領域=同検閲プランゲ文庫所蔵資料 / (6) 領域=同検閲資料 / (7) 領域=同周辺資料

多年にわたり収集した在米資料(例.戦時期から敗戦期にかけての太宰治作品関連)や、新規収集資料を日本側文献と対照し、本文異同を確認し、前後の文脈などを分析し、資料的な整序をする作業を継続した。また、検閲過程や検閲制度の事例研究を進め、特に長崎(浦上)原爆に関する個別的な事例研究を進めた(例.「GHQ/SCAP 検閲の実体」、『占領期雑誌資料大系・文学編』第5巻所収、2010年8月、岩波書店発行)。

加えて、シカゴ大学図書館日本部長奥泉栄三郎(元メリーランド大学図書館プランゲ文庫担当日本人司書)の聞き書き調査、及び同図書館所蔵の周辺資料の調査、プランゲ文庫の周辺事情を調査した。

他方、長崎県立図書館などに関連資料を求めたが、「カトリック新聞」掲載記事などにおける長崎(浦上)原爆の表現の変化を跡付ける作業を、十分に為し得ることが出来なかった。また、他の公的な施設が所蔵する文献などに、未確認の関連資料を探究した。

(8) 領域=同検閲の断片資料の書誌的確認調査
敗戦期の長崎文学や長崎(浦上)原爆に関連し、またGHQ/SCAP 検閲の処分対象となった作品に関連し、その本文確認や資料整理に努めた。

これらに平行し、同検閲の断片的資料(残存する切り取り頁)など、検閲時の実務的作業による原典資料の破碎や、泣き別れや、破本などによって、書誌的な系統性を喪失した資料群がある。これらの資料に対して、書誌的項目以前の書物の生成段階に遡り、そこから立ち返って、書誌的な確認作業や補助的作業を重ね、一点一点、GHQ/SCAP 検閲資料として自立させることに努めた。しかし、この前後において、膨大な予備調査を必要とする作業であるため、また非力であるため、乏しい成果のままであった。

(9)領域=同時期米国日本語図書移動経緯の踏査と原典調査・被占領下の旧内務省資料等の米本国移送過程踏査

複数年にわたり、短期渡米調査を行うことが出来なかった事情により、この領域の作業が十分ではなかった。また、調査活動に不備があった。このため、想定した成果を得ることが出来なかった。

他方、短期渡米調査によって収集した資料は、その後の分析などを経て、例えば旧内務省検閲を含む成果の一部として、在米研究者との共著の形で、論文として公表した。

(10)領域=プランゲ文庫の史的位置付け

この時期の史的項目や文学史的項目を整理し、「私的年表」に追記する作業を継続した。この積み重ねが、プランゲ文庫や、この成立基盤や、この周辺事情を、多面的な構成として整理し、GHQ/SCAP 検閲を史的に位置付けることになるかと考える。

他方、突発的な大震災により、社会的な関心が大きく変化し、この動向に、文学研究の側面から、積極的に関わるべきであると考えた(例、「起点に立ち返る」、『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ』、2011年12月、勉誠出版発行)。このため、この領域の作業量が、十分ではなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

①横手一彦「被爆直下の不条理と情理」2012年9月『昭和文学研究』第65集 昭和文学会発行 p13~p23 査読有

②横手一彦編著『長崎・そのときの被爆少女』本文抄録(『長崎の文学』長崎県高等学校・特別支援学校教育研究会国語部会編集、2012年2月教育研究会発行 P103~P105) 査読無

③横手一彦「旧浦上天主堂被爆遺構の存廃に関する公的議論」2011年9月『平和文化研究』第32集 長崎総合科学大学長崎平和文化研究所発行 p54~p86 査読無

④横手一彦「原爆の実相を無言のままに語る」2010年8月21日「キリスト教新聞」キリスト教新聞社発行 p6 査読無

⑤横手一彦「長崎原爆を長崎浦上原爆と読みかえる—林京子『長い時間をかけた人間の経

験』を軸に」2010年2月『社会文学』日本社会文学会発行 p43~p54 査読有

⑥横手一彦「林京子一人と文学」2010年3月『長崎平和研究』終刊号 長崎平和研究所発行 p146~p147 査読有

⑦横手一彦「検閲された太宰治「パンドラの匣」」『西日本新聞』2009年11月17日 査読無

⑧横手一彦共著ジョナサン・エイブル(米国ペンシルベニア大学助教授)「中野重治「政治と芸術」伏せ字本文とその復元—米国コロンビア大学図書館所蔵『プロレタリア芸術教程』第一輯所収版作品本文(旧内務省検閲原典)」2009年11月『紋説』紋説舎発行 p138~p149 査読無

⑨横手一彦「林京子」2009年11月6日「週間読書人」読書人発行 p5 査読無

⑩横手一彦「プランゲ文庫所蔵版雑誌『ホープ』掲載 PX 内部写真などについて」2008年12月『紋説』紋説舎発行 p140~p157 査読無

⑪横手一彦「島尾敏雄「単独旅行者」の構図」2008年11月『近代文学論集』34号日本近代文学会九州支部発行 p95~p111 査読有

⑫横手一彦「研究動向原爆文学—半世紀の幅に立ち返る」2008年9月『昭和文学』昭和文学会発行 p74~p77 査読有

[学会発表] (計 5 件)

①横手一彦「被ばく直後に立ち返る」日本社会文学会秋季大会 於・熊本学園大学 2012年11月11日

②横手一彦「長崎の原爆文学について」(元活水女子大学長奥野政元氏と討論形式)長崎県立図書館主催 於・同館講堂 2011年7月23日

③横手一彦「表象の浦上」—遠藤周作『女の一生』の場合 長崎市立遠藤周作文学館主催 於同館 2010年11月28日

④横手一彦「ポピュラー文化における被爆者表象」筑紫女学園大学主催 於・アクロス福岡 2009年11月28日

⑤横手一彦「長崎原爆を長崎浦上原爆と読みかえる」日本社会文学会秋季大会 於・宮崎公立大学 2008年11月9日

〔図書〕（計 5 件）

①横手一彦「起点に立ち返る」 2011 年 12 月
『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ』所収
勉誠出版発行 p 239～ p 253 査読有

②横手一彦編著『長崎 旧浦上天主堂 1945-
58—失われた被爆遺産』（同企画編集責任者）
2010 年 4 月岩波書店発行 高原至(撮影者)
ブライアン・バークガフニ(英語訳文) 横手一
彦(日本語文) 本文全 98p

③横手一彦編著『長崎・あのときの被爆少女
—六五年目の『雅子斃れず』』（同企画編集責
任者）2010 年 8 月時事通信社出版局発行 柳
川(旧姓石田)雅子、石田穰一、石田道雄他 本
文全 252p

④横手一彦「GHQ/SCAP 検閲の実体」 2010 年
8 月『占領期雑誌資料大系・文学編』第 5 巻
所収 岩波書店発行 p 348～ p 356 査読有

⑤横手一彦「敗戦と「敗戦期文学」」編著『被
占領下の国語教育と文学』（同企画編集責任
者）所収 2009 年 4 月メリーランド大学図書館
プランゲ文庫発行 p 28～ p 36

6. 研究組織

(1) 研究代表者 横手 一彦
(YOKOTE KAZUHIKO)

長崎総合科学大学・工学部・教授

研究者番号：60240199

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：